日本文学全集　別巻 2

現代詩歌集

思ひ出　智恵子抄
一握の砂　赤光他

河出書房

日本文学全集　別巻 2　現代詩歌集

© 1974

責任編集
武者小路実篤　川端康成
石坂洋次郎　山本健吉
瀬沼茂樹

昭和46年 2 月20日　初版発行
昭和51年 8 月25日　5版発行

編　　者　伊藤信吉
発 行 者　佐藤晧三
印 刷 者　和田彰三
装　　幀　原　弘
印　　刷・東洋印刷株式会社
製　　本・中央精版印刷株式会社

発行所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社　河出書房新社
電話東京（292）大代表 3711
振替口座　東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯にあります

目次

藤村詩集・島崎藤村……三
思ひ出・北原白秋……二一
智恵子抄・高村光太郎……九七
純情小曲集・萩原朔太郎……一二三
殉情詩集・佐藤春夫……一三七
抒情小曲集・室生犀星……一五一
現代詩集・十六人集……一七三
西脇順三郎・宮沢賢治・金子光晴・尾崎喜八・田中冬二・高橋新吉・吉田一穂・三好達治・丸山薫・北川冬彦・村野四郎・小野十三郎・草野心平・伊東静雄・中原中也・立原道造
みだれ髪・与謝野晶子……二九七
一握の砂・石川啄木……三二五
赤光・斎藤茂吉……三六七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

藤村詩集（抄）

島崎藤村

明治五年二月、本名春樹、長野県第八大区五小区馬籠村に生まる。島崎家は永正十年木曽にきて木曽氏に仕え、のちに郷士となり帰農。徳川時代には木曽街道の馬籠宿の本陣、問屋、庄屋をつめた。父正樹は十七代目にあたり平田派の国学を信奉、明治維新により家産を傾け、晩年を不遇に閉じたという。明治二十四年六月、明治学院卒業後、北村透谷等と『文学界』を創刊。明治三十年、第一詩集『若菜集』刊行。明治三十九年『破戒』により作家としての位置を確立。近代詩、近代小説の嚆矢を放ったといえる。昭和十八年一月歿。

合本詩集初版の序

遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。

そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき。

うらわかき想像は長き眠りより覚めて、民俗の言葉を飾れり。

伝説はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたゝび新しき色を帯びぬ。

明光はまのあたりなる生と死とを照せり、過去の壮大と衰頽とを照せり。

新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆実なる青年なりき。その芸術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた偽りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙はかれらの頬をつたひしなり。こころみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寝食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。

われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの声に和しぬ。

詩歌は静かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦闘の告白なる。

なげきと、わづらひとは、わが歌に残りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いさゝかなる活動に励まされてわれも身と心とを救ひしなり。

誰か旧き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじし新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。

生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。

芸術はわが願ひなり。されどわれは芸術を軽く見たりき。むしろわれは芸術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。

あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。

わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草四つの巻とはなれり。われは今、青春の記念として、かゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。

明治三十七年の夏　四巻合本成るの日

藤村

初恋

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

狐のわざ

庭にかくるゝ小狐の
人なきときに夜いでて
秋の葡萄の樹の影に
しのびてぬすむつゆのふさ

恋は狐にあらねども
君は葡萄にあらねども
人しれずこそ忍びいで
君をぬすめる吾心

君がこゝろは

君がこゝろは蟋蟀の
風にさそはれ鳴くごとく
朝影清き花草に
惜しき涙をそゝぐらむ

それかきならす玉琴の
一つの糸のさはりさへ
君がこゝろにかぎりなき

しらべとこそはきこゆめれ
あゝなどかくは触れやすき
君が優しき心もて
かくばかりなる吾こひに
触れたまはぬぞ恨みなる

秋に隠れて

わが手に植ゑし白菊の
おのづからなる時くれば
一もと花の暮陰に
秋に隠れて窓にさくなり

知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥の
声にもれくる一ふしを
知るや君

深くも澄める朝潮の
底にかくるゝ真珠を
知るや君

あやめもしらぬやみの夜に
静にうごく星くづを
知るや君

まだ弾きも見ぬをとめごの
胸にひそめる琴の音を
知るや君

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり
秋海棠の花を分け
空ながむれば行く雲の
更に秘密を闡くかな

小詩二首

一

ゆふぐれしづかに
　ゆめみんとて
よのわづらひより

しばしのがる

きみよりほかには
　しるものなき
花かげにゆきて
　こひを泣きぬ

すぎこしゆめぢを
　おもひみるに
こひこそつみなれ
　つみこそこひ

いのりもつとめも
　このつみゆゑ
たのしきそのへと
　われはゆかじ

なつかしき君と
　てをたづさへ
くらき冥府(よみ)までも
　かけりゆかん

二

しづかにてらせる
　月のひかりの
などか絶間なく
　ものおもはする
さやけきそのかげ
　こゑはなくとも
みるひとの胸に
　忍び入るなり

なさけは説(と)くとも
　なさけをしらぬ
うきよのほかにも
　朽(く)ちゆくわがみ
あかさぬおもひと
　この月かげと
いづれか声なき
　いづれかなしき

草枕

夕波くらく啼(な)く千鳥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

われは千鳥にあらねども
心の羽をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋に
なぐさめもなくなげきわび
胸の氷のむすぼれて
とけて涙となりにけり

蘆葉を洗ふ白波の
流れて巖を出づるごと
思ひあまりて草枕
まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の
なきなぐさめを尋ね侘び
道なき森に分け入りて
などなき道をもとむらん

われもそれかやうれひかや
野末に山に谷蔭に
見るよしもなき朝夕の
光もなくて秋暮れぬ

想も薄く身も暗く
残れる秋の花を見て
行くへもしらず流れ行く
水に涙の落つるかな

身を朝雲にたとふれば
ゆふべの雲の雨となり
身を夕雨にたとふれば
あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして
風に吹かれて飄り
朝の黄雲にともなはれ
夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ乱れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿の宮城野よ
乱れて熱き吾身には

日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴と聴き
悲み深き吾目には
色彩なき石も花と見き

あゝ孤独の悲痛を
味ひ知れる人ならで
誰にかたらん冬の日の
かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば
空冬雲に覆はれて
身にふりかゝる玉霰
袖の氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風勁く
小川の水の薄氷
氷のしたに音するは
流れて海に行く水か

啼いて羽風もたのもしく
雲に隠るゝかさゝぎよ
光もうすき寒空の
汝も荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日の
光もなくて暮れ行けば
人めも草も枯れはてて
ひとりさまよふ吾身かな

かなしや酔ふて行く人の
踏めばくづるゝ霜柱
なにを酔ひ泣く忍び音に
声もあはれのその歌は

うれしや物の音を弾きて
野末をかよふ人の子よ
声調ひく手も凍りはて
なに門づけの身の果ぞ

やさしや年もうら若く
まだ初恋のまじりなく
手に手をとりて行く人よ

なにを隠るゝその姿
野のさみしさに堪へかねて
霜と霜との枯草の
道なき道をふみわけて
きたれば寒し冬の海

朝は海辺の石の上に
こしうちかけてふるさとの
都のかたを望めども
おとなふものは濤ばかり

暮はさみしき荒磯の
潮を染めし砂に伏し
日の入るかたをながむれど
湧きくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の
岩に砕けて散れるとき
かなしいかなや冬の日の
潮とともに帰るとき

誰か波路を望み見て
そのふるさとを慕はざる
誰か潮の行くを見て
この人の世を惜まざる

暦もあらぬ荒磯の
砂路にひとりさまよへば
みぞれまじりの雨雲の
落ちて潮となりにけり

遠く湧きくる海の音
慣れてさみしき吾耳に
怪しやもるゝものの音は
まだうらわかき野路の鳥

嗚呼めづらしのしらべぞと
声のゆくへをたづぬれば
緑の羽もまだ弱き
それも初音か鶯の

春きにけらし春よ春
まだ白雪の積れども
若菜の萌えて色青き
こゝちこそすれ砂の上に

春きにけらし春よ春
うれしや風に送られて
きたるらしとや思へばか
梅が香ぞする海の辺に

磯辺に高き大巌の
うへにのぼりてながむれば
春やきぬらん東雲の
潮の音遠き朝ぼらけ

小詩

くめどつきせぬ
わかみづを
きみとくまゝし
かのいづみ

かわきもしらぬ
わかみづを
きみとのまゝし
かのいづみ

かのわかみづと
みをなして
はるのこゝろに
わきいでん

かのわかみづと
みをなして
きみとながれん
花のかげ

高楼

わかれゆくひとををしむとこよひより
とほきゆめちにわれやまとはん

妹

とほきわかれに
たへかねて
このたかどのに
のぼるかな

かなしむなかれ
　わがあねよ
たびのころもを
　とゝのへよ

姉

わかれといへば
　むかしより
このひとのよの
　つねなるを

ながるゝみづを
　ながむれば
ゆめはづかしき
　なみだかな

妹

したへるひとの
　もとにゆく
きみのうへこそ
　たのしけれ

ふゆやまこえて
　きみゆかば
なにをひかりの
　わがみぞや

姉

あゝはなとりの
　いろにつけ
ねにつけわれを
　おもへかし

けふわかれては
　いつかまた
あひみるまでの
　いのちかも

妹

きみがさやけき
　めのいろも
きみくれなゐの
　くちびるも

きみがみどりの
　くろかみも

またいつかみん
　このわかれ

姉

なれがやさしき
　なぐさめも
なれがたのしき
　うたごゑも

なれがこゝろの
　ことのねも
またいつきかん
　このわかれ

妹

きみのゆくべき
　やまかはは
おつるなみだに
　みえわかず

そでのしぐれの
　ふゆのひに
きみにおくらん

はなもがな

姉

そでにおほへる
　うるはしき
ながかほばせを
　あげよかし

ながくれなゐの
　かほばせに
ながるゝなみだ
　われはぬぐはん

かもめ

波に生れて波に死ぬ
情の海のかもめどり
恋の激浪たちさわぎ
夢むすぶべきひまもなき

闇き潮の驚きて
流れて帰るわだつみの
鳥の行衛も見えわかぬ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook